

明年、創立50周年を迎える東洋哲学研究所は、宗教学の対話と相互理解をその主要な活動の一つとしている。池田大作創価学会名誉会長とアブドゥルラフマン・ワヒド元インドネシア共和国大統領との一連の対話やイスラーム・レクチャーなどにみられるように、特にイスラームと仏教間の対話と相互理解に向けて先進的役割を果たしてきた。このことに鑑み、カナダ出身で

ると言えよう。彼にとって宗教とは、対象として固定したものではなく、現実の中での超越的なものとの生きた人格的な関わりのことであり、したがってそこには内観的理解が不可欠となる。とはいえ、彼は決して客観性を無視するわけではない。むしろ、「歴史家」として、宗教者が超越者との関わりの中で現実に対処する様を正しく把握し、問題があればそれを共感的に理解し、共に

W・キャンントウエル・スミスと比較宗教学

中村廣治郎

考え、相互に
学び合うべき
だとする。

もともと彼

世界的に著名な比較宗教学者・イスラーム学者であり、ハーバード大学での私の恩師の一人でもあるW・キャンントウエル・スミス（1916～2000）の考えの一端を紹介することは有意義と思われる。

わが国の宗教学の一般的傾向が経験科学の方法に基づく客観主義にあるとすれば、それと対照的にスミスの宗教学理解へのアプローチはパーソナル（人格的）であ

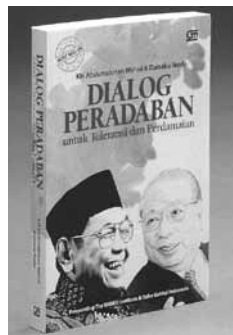
は、学生時代からリベラルではあっても、熱心なクリスチャンとして活動しており、40年代前半、カナダ連合教会の牧師としてインドで4年間教鞭を執る間、インドのムスリム、ヒンドゥー教徒、シーク教徒の知識人や学生と親しく交わり、この時の体験が彼の宗教学理解の方法を大きく決定づけたと思われる。彼にとつて今や、グローバル化の流れの中で、キリスト教の絶対

性は過去のものになり、宗教多元主義の時代に至っている。そこでは、各宗教は独自性をもちつつも、人類共同体という一つの宗教史のキリスト教的、仏教的、イスラーム的、中国的表現として理解されるべきだとする。このことは同時に、各宗教の伝統的立場の主体的創造的見直しを要求する。その上で、比較により宗教者相互の立場の共通点・相違点を明らかにする。とはいえ、それはあくまでも形式的比較ではなく、当事者が考える意味の上での比較である。そこにスマイスは比較宗教学の役割をみる。そして彼は、その理念を具体的に大学の教育制度の中に生かそうとしてきたのである。そこには、本研究所の理念と共通するものがあると思われる。

(なかむら こうじろう／東京大学名誉教授)



対談集の論評会が、同国最大のイスラーム団体「ナフダトゥール・ウラマ」の本部で開かれ、「模範とすべき文明間対話の方途を示した書」（同団体のアブドゥル・ムニム副書記長）などの発言が聞かれた（本年4月19日、ジャカルタ）。同国は世界最大人口のイスラーム国



東洋哲学研究所創立者とワ
ヒド元インドネシア大統領
の対談集『平和の哲学 寛
容の智慧——イスラームと仏
教の語らい』のインドネシ
ア語版（2010年刊）